

コラム 「きのうきょう」

就職活動で、アナウンサーになるか、落語家になるか。
迷ったというのはニッポン放送スポーツアナウンサーの
栗村智さん(58)だ。



広島の広島学院高1年の冬休み。大学入試の下見で上京した。手には東京の知人に、と母から託された名産の広島菜漬。ところが、土産は落語家の五代目柳家小さん師匠宅へ。覚悟の弟子入り志願だった。

小さん師匠には、手紙で落語指導を受けていた。高座での振る舞い、視線を上下させる、顔は左右に振る。演じる人間によって、いろいろと変える。同封した返信用封書が来るのがうれしかった。

東京駅で師匠宅に電話した。

「分かった。新宿末広亭に来い。知らない？ じゃあな国電に乗って新宿で降りる。次は伊勢丹を目指せ。伊勢丹の近くに交番があるから、末広亭の場所を聞け」

のちに人間国宝となる人に、道案内をさせた人は珍しい。

憧れの師匠に会えた。

いかに落語を好きか、懸命に話していると、師匠が自分の顔をまねたタヌキの絵入り色紙を筆で書いてくれた。できあがると弟子に渡して火鉢で乾かす。

「いまだと思って弟子にしてください、とお願いしたら。師匠の表情が変わって…」
色紙を書く手が止まった。

「お客さんだと思ってた。それがなんだい。親御さんは知ってるのかい」

高校を卒業したら、また来なさい。大学へ行ったら落語研究会というのがあるし、東京の大学なら落語も聞きにいける。

「あんちゃん、大学へ行きな」

師匠の説得に納得した。「はい僕、大学へ行きます」。

「ほう分かったかい。じゃあ嘶を聞いていきな」

「ありがとうございます。師匠、粗忽長屋をやってください」

近くにいた弟子が顔を真っ赤にして怒っている。粗忽長屋は師匠の十八番。大ネタだ。常識外の注文にも、「ほか(の落語家)がやっていなきややるよ」

小さんを何度もびっくりさせた高校生は中央大学へ。落研にも入った。1973年、「神田川」(南こうせつ)がヒットしたころだった。